

# 半七捕物帳

海坊主

岡本綺堂

青空文庫



「残念、残念。あなたは運がわるい。ゆうべ来ると大変に御馳走があつたんですよ」と、半七老人は笑つた。

それは四月なかばのうららかに晴れた日であつた。

「まったく残念でした。どうしてそんなに御馳走があつたんです」と、わたしも笑いながら訊いた。

「と云つて、おどかしただけで、実はさんざんの体ていで引き揚げて来たんですよ。浅蜷あせりツ貝を小一升と、木葉こつばのような鱗かたいを三枚、それですぶ濡れになつちやあ魚屋さかなやも商売になりませんや。はははははは」

よく訊いてみると、きのうは旧暦の三月三日で大潮おほしおにあたるというので、老人は近所の人たちに誘われて、ひさしぶりで品川へ潮干狩しおひがりに出かけると、花どきの癖で午頃ひるから俄か雨がふり出して来た。船へ逃げ込んで晴れ間を待ちあわせていたが、容易に晴れるどころか、ますます強降りになつて来るらしいので、とうとう諦めて帰つてくると、意地の

わるい雨は夕方から晴れて、きようはこんな好天気になった。なにしろ前に云ったような獲物だからお話にならない。浅蜷はとなりの家へやって、鰈は老婢ばあやとふたりで煮て食ってしまったといふのであつた。

きのうの不出来は例外であるが、一体に近年はお台場の獲物がひどく少なくなつたらしいと老人は云つた。それからだんだんと枝がさいいて、次のような話が出た。

安政二年三月四日の午過ぎひるすに、不思議な人間が品川沖にあらわれた。

この年は三月三日の節句こしぎめに小雨が降つたので、江戸では年中行事の一つにかぞえられていくくらいの潮干狩があくる日の四日に延ばされた。きようは朝から日本晴れという日和ひよりであつたので、品川の海には潮干狩の伝馬てんまや荷足船にたりぶねがおびただしく漕ぎ出した。なかには屋根船で乗り込んでくるのもあつた。安房上総あわかずさの山々を背景にして、見果てもない一大遊園地と化した海の上には、大勢の男や女や子供たちが晴れた日光にかがやく砂を踏んで、はまぐりや浅蜷の獲物をあさるのに忙がしかつた。

かれらの多くは時刻の移るのを忘れていたので、午飯ひるめしを食いかかるのが遅かつた。ある者は船に帰つて、家から用意してきた弁当の重詰をひらくのもあつた。ある者は獲物の

はまぐりの砂を吐かせる間もなしに直ぐに吸物にして味わうのもあった。ある者は貝のほかに小さい鰈や鮪こちをつかんだのを誇りにして、煮たり焼いたりして賞しょうがん 翫くわんするのもあった。砂のうえに毛氈もうせんや薄縁うすべりをしいて、にぎり飯や海苔卷のりまきの鮓すしを頬張ほくぢっているのもあった。彼等はあたたかい潮風に吹かれながら、飲む、食う、しゃべる、笑うのに余念もなかった。

その歡樂の最中であつた。ひとりの奇怪な人間が影のようにあらわれて来たのであつた。勿論、どこから出て来たのか知れなかつたが、かれは年のころ四十前後であるらしく、髪の毛をおどろに長くのばして、その人相もよくわからない。顔のなかから鋭い眼玉ばかりが爛々と光つていた。身には破れた古ふる 袷あわせをきて、その上に新らしい蓑みのをかさねて、手には海苔ヒビのような枯枝の杖を持って素足でぶらぶらと迷い歩いている。その風体ふうていがここらの漁師ともみえなかつた。さりとて普通の宿無し乞食とも思われない。まずは一種の気ちがいか、絵にかいてある仙人のたぐいかとも見られるので、彼の通る路々の人はいずれも眼をみはつて見送つていた。こうして、不思議そうに見かえられ見送られながら、彼は一向平気で潮干の群れのあいだをさまよい歩いているので、若い女などは気味わるそうに人のかげに隠れるのもあつた。船のなかへ逃げ込むのもあつた。

しかしこの奇怪な男は、別に他人に対して何事をするでもないらしかった。さりとして諸人が遊びたわむれているのを見物してあるいているのでも無いらしかった。唯その鋭い眼をひからせて、なにを見るときもなしに迷いあるいているだけのことであったが、そのうちに彼は職人らしい一群に取り囲まれた。酔っている職人のひとりには彼のまえに立ちふさがつて、大きい猪口ちよこを突きつけた。

「おい、大将。頼む、一杯のんでくれ」

奇怪な男はにやにや笑いながら、無言でその猪口を受け取って、相手のついでくれた酒をひと息にぐつと飲みほした。

「やあ、馬鹿に飲みっぷりがいいぜ、もう一杯たのもう」と、ほかの一人が入れ代って猪口を突き出すと、かれは猶予なしにそれをも飲んでしまった。

それが一種の興をひいたらしく、ほかの群れから食いのこりの握り飯を持って来たものがあったが、彼はそれをも快くむしゃむしゃと食った。海苔巻の鮓や塩せんべいや、なんでもかでも彼のまえに突き出されたものは忽ちにみんな彼の口へはいつてしまった。しかも彼は唯ときどきににやにやと笑うばかりで、かつて一と言も云わなかった。なにを話しかけても、なにを訊きいても、かれはつんぼうであるかのように、一切その返事をしなかつ

た。かれは面白半分に職人から突き付けられた酒や食い物を、ただ黙って飲み食いしているだけであるので、まわりを取り巻いている人々も少しく倦あきて来た。彼もさすがに満腹したらしく、勿論なんの挨拶もなしに、諸人の囲みをぬけて又ふらふらとあるき出した。彼はそれから何処へ行ったか、別に詮議せんぎするものもなかった。どこの船でも午飯をすませて、再び潮干狩をつづけていると、やがて夕七ツ（午後四時）を過ぎたかと思うころに、かの男は又ふらふらとあらわれた。かれは誰に云うとも無しに、遠い沖の方を指さして叫んだ。

「潮がくる、潮がくる」

その声におどろかさされて、ある人々はかれの指さす方に眼をやったが、広い干潟ひがたに潮のよせてくるような景色はみえなかった。きようの夕潮までにはまだ半刻はんときあまりの間があることは誰も知っていた。かれは高い空を指さして又叫んだ。

「颯風はやてがくる。天狗が雲に乗ってくる」

今度かれが指さしたのは沖の方でなかった。かれは反対に陸おかの方角を仰いで、あたかも愛宕山あたごやまあたりの空を示しているのであった。この気ちがいじみた警告に対して、別に注意の耳をかたむける人も少なかったが、それでも品川の海に馴れている者は少しく不安を

感じて、かれの指さす方角をみかえると、春の日のまだ暮れ切らない江戸の空は青々と晴れて鎮まっていた。

「颯風はやてがくる」と、かれは又叫んだ。

天気晴朗の日でも品川の海には突然颯風を吹き起すことがある。船頭たちは無論それを知っているのです、この奇怪な男の警告を一概に笑って聞き流すわけにも行かなかつたが、そうした恐ろしい魔風を運び出して来るらしい雲の影はどこにも見えないので、かれらはやはり油断していると、男はつづけて叫んだ。

「潮が来る。颯風が来る」

かれの声はだんだんに激して来た。かれはいよいよ物狂おしいようになって、そこらじゅうを駆けまわって叫びあるいた。

「颯風がくる。潮がくる」

颯風が襲って来るのと、潮が満ちて来るのとは、別問題でなければならなかつた。それを知っている者はやはり笑っていたが、彼は諸人の危急がいま目の前に迫っているかのよう、片手に空を指さし、片手に沖を指さして、跳おとりあがって叫びつづけた。

「颯風がくる」



跳り狂つて飛びまわっているうちに、彼は砂地の窪んだところへ足をふみ込んで、引き残った潮溜りのなかに横ざまに倒れた。倒れながらも彼はやはり其の叫び声をやめなかつた。

「この気がいめ」

気の早い者は腹を立てて、そこらに転がっている貝殻をつかんで投げつけた。ある者は砂をつかんで浴びせかけた。それでも彼は口をとじなかつた。貝殻がばらばらと飛んでくるうちに、その大きい一つが彼の額にあたって左の眉の上からなま血が流れ出したので、血に染み、砂にまぶれた彼の顔は物凄かつた。かれはその眼をいよいよ光らせて、颯風と潮とを叫んだ。こうなると一方に気がい扱いにしていながらも、かれの警告に対して諸人の胸の奥に一種の不安が微かに湧き出して来た。女子供を多く連れている組では、そろそろ帰り支度に取りかかる者もあつた。そのうちに或る船の船頭……それは老人で、さつきから彼の男と同じように、小手をかざして陸上の空を仰いでいたのであるが、俄かに突つ立ちあがつて大音に唳鳴つた。

「颯風だ、颯風だぞう。早く引きあげろよう」

海の上に生活している彼の声は大きかつた。それが遠いところまでも響き渡つて諸人の

耳をおどろかした。愛宕山の上かと思われるあたりに、たったひと掴みほどの雲があらわれたのである。ほかの船頭共も俄かにさわぎ出した。かれらも声をそろえて、颶風だ颶風だと叫んで触れまわった。潮の退いてる海ではあるが、それでも颶風の声は人々の胸を冷やした。遠いも近いも互いに呼びつれて、あわただしく自分たちの船へ引きあげようとする時、一陣のすさまじい風が突然に天から吹きおとして来た。黒い雲はちつとも動かないで、ゆう日の沈み切らない西の空はやはり明るく晴れているのであるが、海の上には眼に見えない風がごうごうと暴れ狂つて、足弱な女子供はとも立ってはいられなくなつた。ある者はよろめき、ある者は吹き倒されて、いずれも砂の上にうつ伏してしまつた。船の軒にかけてあるほおずき提灯や、そこらに敷いてある毛氈や薄縁のたぐいは、何者かに引つ掴まれたように虚空遙かに巻きあげられた。人々は悲鳴をあげてうろたえ騒いだ。

船頭どもは駈けまわつて、めいめいが預かりの客をとにかくも船のなかへ助け入れようと燥つているうちに、きようはどうしたものか、予定の時刻よりも出潮が少し早いらしく、砂地のそこからもここからも無数の蟹が群がったように白い泡をぶくぶく噴き出して来たので、船頭どもは又あわてた。

「潮がさして来る。潮が来る」と、かれらは暴い風と闘いながら叫びまわった。

颯風も幸いに長くなかった。しかし潮はだんだんに満ちてくるので、人々はいよいよろたえて船へ逃げあがった。死人は一人もなかったが、颯風が吹いて通るときに木の枝や何かを叩きつけられて、顔や手足に負傷した者もあった。吹き倒されて貝殻や石に傷つけられた者もあった。手拭などは吹き飛ばされて、男も女もみな散らし髪になってしまった。船にぬいで置いた上衣などは大抵どこへか飛んで行った。男の紙入れ、女のかんざし、そんな紛失物はかぞえ切れなかった。

はまぐりや浅蜷の獲物も大抵捨てて帰った。命に別状のなかったのをせめてもの仕合わせにして、きょうの潮干狩の群れはさんざんの体でみな引き揚げた。

## 二

めいめいの宿許へ引き揚げて、やれよかったと初めて落ちつくと共に、どの人の口の上つたのもかの奇怪な人間の噂であった。その風体や拳動が奇怪であるのは云うまでもない、更に奇怪を感じしめたのは、彼が誰よりも先に颯風や潮を予報したことであった。

老練の船頭すらもまだそれを発見し得ない間に、かれがどうして逸早くそれを予覚したのであろうか。はじめは気がいの嚙言ぐらゐに聞きながしていた彼の警告が一々凶星にあたつていたのである。人か神か、仙人か、諸人はその判断に迷つた。

混乱の折柄で、彼がそれからどうしたか、どこへ行つてしまつたか、誰もたしかに見とどけた者はなかつたが、最後にここを引き揚げたのは、築地河岸の船宿山石の船で、その船頭は清次という若い者であつた。乗合いは男五人と女ひとりで、船には酒肴をたくさん積み込んで、潮干狩は名ばかりで、大抵は船のなかで飲み暮らしていたが、午すぎになつてから、船を出て、人真似に浅蜷などを少しばかり拾いはじめると、かの颯風に出逢つて狼狽して、五人のうち二人は早々に船へ逃げ込んで来たが、ほかの三人と女とが戻つて来ないので、ふたりは心配して又探しに出た。

清次も見えていられないので、一緒にそこらを探してあるいたが、何分にも風が烈しいので、叩きつけるような砂や小石を眼口に打ち込まれて、度をうしなつて暫く立ちすくんでいるうちに、ふたりの男のゆくえを見失つてしまつた。やがて眼をあいて再びそこらを探しあるいてみると、よほど離れた砂の上にひざまずいて、ひとりの女がひとりの男と何か話しているらしいのを遠目にみた。女はどうやら自分の船の客らしいので、清次はもしも

しと呼びながら近寄ろうとする時に、又もや颯風がどつと吹きおろして来たので、清次も堪まらなくなつて砂地にうつ伏した。かれが頭をあげた時には、その女も男ももう見えなかつた。船へ帰ると、五人の男もかの女客もいつの間にか無事に戻つていた。

ただそれだけであれば、別に仔細もないが、その時かの女客と話していらしい男が奇怪な人間の姿であつたように清次の眼に映つたのである。混雑の場合でもあり、又そんなことを詮議すべきでもないので、清次はなんにも云わずに漕いで歸つた。

そこでは何も云わなかつたが、かの奇怪な男の噂が出るたびに、清次はそれを人にしやべつた。自分の船の女の客がどうも彼の奇怪な男と知り合ひでもあつたらしいと吹聴した。その日の客のうちで男ふたりは二度ばかり山石に船をたのみに来たことがあつたが、馴染が浅いのでこの人だか知れなかつた。ほかの三人と女ひとりとは初めての客であつた。したがつて彼等のすべてが何者であるか一向判らなかつたが、なんでも下町したまちの町人らしい風俗で、船頭の祝儀も相当にくれた。

それが半七の耳にはいつた。かれはすぐ築地河岸へ出向いて、まず船頭の清次をしらべたが、清次は前にも云つたほかには何も知らないと云つた。船宿では猶なほさら更知らなかつた。「もしその客のどれかが又来たら、きつとおれの所へ知らせしてくれ。悪くすると飛んだ引

き合いを食うぞ」

半七は念を押して帰った。それはもうかの潮干狩から半月ばかり後であった。神田三河町の家へ帰ると、半七はすぐに自分の幸次郎をよんで、清次という若い船頭の身許をしらべると命令した。幸次郎は受け合つて帰つたが、そのあくる日すぐに直して来た。

「親分、大抵はわかりましたが、船頭仲間で訊いてみましたら、あの清次という野郎は今年二十一か二で、これまで別に悪い噂もなかつたと云います」

「なんにも道楽はねえか」

「商売が商売だから、酒も少しは飲む、小博奕ぼくちぐらいは打つようだが、別に鼻をつままれるような忌いやなこともしねえそうですよ。品川の女に馴染なじみがあるそうだが、これも若い者のことでしょうかありますめえ」

「身にひきくらべて鼻ひいき痕きずをするな」と、半七は笑つた。「だが、まあ、いいや。そこまで判れば大抵の見当は付いた。御苦勞ついでに品川へ行つて、あいつが此の頃の遊びっぷりをしらべて来てくれ。店の名は判つているだろうな」

「わかつています。化伊勢ばけのお辰という女です。すぐに行つて来ましょう」

幸次郎は又出て行つたが、その晩、かれが引つ返して来ての報告は半七を少し失望させ

た。

「清次は月に四、五たびは来るそうですが、まあ身分相当といつたくれえの使いっぷりで、今月になって二度来たが、別に派手なこともしねえと云いますよ。どうでしょう。もう少しほかを洗ってみましょうか」

「まあ、よかろう。今になんとかなるだろう」と、半七は云った。「だが、まあ、これだけじゃあ済まねえ。これからもあの野郎に気をつけてくれ」

「ようがす」

幸次郎はかさねて受け合つて帰つたが、別に取り留めたことも探し出さないとみえて、それから又半月ほど過ぎるまで、この一件に就いてはなんの新らしい報告も持つて来なかつた。人の噂も七十五日で、潮干狩の噂はだんだんに消えて行つた。半七もほかの仕事に忙がしく追われていたが、それでも彼の頭にはまだこの一件がこびり付いていて離れなかつた。

「あの船頭はどうした」と、半七はときどきに催促した。

「親分も執念ぶけえね」と、幸次郎は笑つていた。「わつしも如才じよさいなく気をつけてはいませんが、どうもなんにも当りがねえんですよ」

「その客というのもそれぎり来ねえか」

「それぎり顔をみせねえそうです」

こうして四月も過ぎ、五月になつて、梅雨らしい雨が毎日ふりつづいた。五月十日の朝である。半七がいつもよりも少し朝寝をして、楊枝をつかいながら縁側へ出ると、となりの庭の柘榴の花があかく濡れていた。外では稗蒔を売る声がきこえた。

「ああ、きょうも降るかな」

鬱陶しそうに薄暗い空をみあげていると、表の格子をがたぴしと明けて、幸次郎があらわただしく飛び込んで来た。

「親分。起きましたかえ」

「いま起きたところだ。何かあつたか」

潮干狩の一件以来、幸次郎は半七に催促されるのが苦しいので、築地河岸の船頭はいうまでもなく、芝浦から柳橋、神田川あたりの船宿をまわつて、絶えず何かの手がかりを見つけ出そうと焦っているうちに、けさ偶然にこんなことを聞き出したのである。しかもそれはゆうべのことで、神田川の網船屋の船頭の千八というのがおなじみの客をのせて隅田川の上の方へ夜網に出た。客は本郷の湯島に屋敷をかまえている市瀬三四郎という旗本の



隠居であつた。あずま橋下からだんだんに綾瀬の方までのぼって行つたのは夜も四ツ（午後十時）をすぎた頃で、雨もひとしきり小歇こやみになつた。もちろん濡れる覚悟であつたから、客も船頭も蓑みの笠かさをつけていたが、雨がやんだらしいので隠居は笠をぬいだ。笠の下には手ぬぐいで頬かむりをしていた。

「素しろ人は笠をかぶっていると、思うように網が打てない」

隠居は自分でも網を打つのである。今夜はあまり獲物が多くないので、かれは少し焦じれ気味でもあつた。

「網を貸せ。おれが打つ」

船頭の手から網を取つて、隠居は暗い水の上にきつと投げると、なにか大きな物がかかつたらしい。鯉なますか鯰なますかと云いながら、千八も手つだつて引き寄せると、大きい獲物は魚でなかつた。それはたしかに人の形であつた。水死なきの亡がら骸がらが夜網にかかるのは珍らしくない。船頭はこれまでもそんな経験があるので、又お客様かといやな顔をした。かがり火の光りでそれが男であることを知ると、彼はすぐに流そうとした。

「むかしの船頭仲間には一種の習慣がありましてね」と、半七老人はここでわたしに説明してくれた。「身投げのあつた場合に、それが女ならば引き上げて助けるが、男ならば助

けない。なぜと云うと、女は氣の狭いものだから詰まらないことにも命を捨てようとする。死ぬほどのことでもないのに死のうとするのだから助けてやるが、男の方はそうでない。男が死のうと覚悟するからには、死ぬだけの理窟があるに相違ない。どうしても生きていられないような事情があるに相違ない。いつそ見殺しにしてやる方が当人の為だ、と、まあこういうわけで、男の身投げは先ず助けられないことになっている。それが自然の習慣になつて、ほかの水死人を見つけた時にも、女は引き上げて介抱してやるが、男は大抵突き流してしまふが多い。男こそいい面の皮だが、どうも仕方がありませんよ」

ここの船でも船頭が男の水死人を突き流そうとするのを、隠居は制した。

「まあ、引き上げてやれ。なにかの縁でおれの網にはいったのだ」

こう云われて、千八も争うわけには行かなかつた。かれは指図の通りに網を手繰つて、ともかくもその男を船のなかへ引き上げると、かれは死んでいゝるのではなかつた。網を出ると、彼はすぐにあぐらをかいた。

「なにか食い物はないか。腹が減つた」

隠居も千八もおどろいてみると、男はそこにある魚籠びくに手を入れて、生きてた小魚をつかみ出してむしゃむしゃと食つた。二人はいよいよ驚かされた。

「まだ何かあるだろう。酒はねえか」と、彼はまた云った。「ぐずぐずしていやあがると、これだぞ」

かれは腹巻からでも探り出したらしい、いきなりにあいくち首を引きぬいて二人の眼さきに突きつけたので、船頭は又びつくりした。しかし一方は武家の隠居である。すぐにその刃物をたたきおとして再び彼を水のなかへ投げ込んでしまった。

「はは、悪い河かわ獺とそだ」と、隠居は笑っていた。

しかし、それが河獺でないことは判り切っていた。千八はただ黙っていると、隠居はこれに興をさましたらしく、今夜はもうこれで帰ろうと云った。船頭はすなおに漕いで帰った。

この報告を終つて、幸次郎は半七の顔色をうかがった。

「どうです。変な話じゃありませんか」

### 三

半七は黙つてその報告を聞いていたが、やがて思い出したようにうなずいた。

「むむ、そんな話が去年もあつたな。おめえは知らねえか」

「知りませんね」と、幸次郎は首をかしげた。「やっぱりそんな話ですかえ」

「まあ、そうだ。なんでもそれは麻布あきぶ辺の奴らだ。町人が三、四人で品川へ夜網に行くと、海のなかから散らし髪かみの男がひよつくり浮き出したので、船の者はびっくりしていると、その男はいきなり船へ飛び込んで来て、なにか食わせると云うんだ」

「へえ、よく似ていますね」と、幸次郎は不思議そうに眼を見はった。「それからどうしましたえ」

「こつちは呆あつ気にとられているから、なんでも相手の云うなり次第あつげき。船に持ち込んでい  
る酒と弁当を出してやると、息もつかずに飲んで食って、また海のなかへはいつてしまつ  
たそうだ」

「まるで河童かっぱか海坊主のような奴ですね。そうすると、ゆうべの奴もやっぱりそれでしょうよ」

「きつとそれだ」と、半七は云つた。「いくら広い世のなかだつて、そんな変な奴が幾人もいるわけのものじゃあねえ。きつとおなじ奴に相違あひだねえ。このあいだの潮干狩うしほに出て来た奴もやっぱりそれだろう。だが、妙な奴だな。人間の癖くせに水のなかに棲すまんでいて、時々

に陸おかや船にあがってくる。まったく河童の親類のような奴だ。葛西かさいの源兵衛堀でも探してみるか

「ちげえねえ」と、幸次郎も笑った。

この頃、顔やからだを真っ黒に塗って、なまの胡瓜きゅうりをかじりながら、「わたしや葛西の源兵衛堀、かつぱの伴でござります」と、唄ってくる一種の乞食があった。したがって河童といえば生の胡瓜を食うもの、河童の棲家すみかといえれば源兵衛堀にあるというように、一般の人から冗談半分に伝えられて、中にはほんとうにそれを信じている者もあつたらしい。半七は笑いながら又訊きいた。

「ゆうべの奴は匕首のようなものを出したと云つたな」

「そうです。なんでも光るものを船頭の眼のさきへ突き付けたそうですよ」

「いよいよ変な奴だな。そんな奴を打つちやつて置くと、世間の為にならねえ。しまいは何を仕出来しでかすか知れねえ。おれもよく考えて置こう。おめえも気をつけてくれ」

幸次郎を帰したあとで、半七はいろいろに考えた。幸次郎の報告で、ゆうべの出来事も大抵は判っているものの、念のためにもう一度、その船頭の千八に逢つてくわしい話を聴いたらば、又なにかの手がかりを探り出すことがないとも限らない。半七は起たつて窓をあ

けると、一旦晴れそうになった今朝の空もまた薄暗く陰くもつて来た。

「しようがねえな」

舌打ちしながら半七は神田の家を出ると、横町の角でわかい男に逢った。男は築地の山石の船頭清次であつた。

「親分さん。お早うございます」

「やあ、清公。どこへ行く」

「おまえさんの家うちへ……。丁度いいところで逢いました」と、清次はすり寄つて来てささやいた。「実はね、このごろは毎日天氣が悪いので、商売の方もあんまり忙がしくないもんですから、きのうの午ひるすぎに小梅の友達のところへ遊びに出かけました。すると、その途中でひとりの女に逢つたんですよ。その女は近所の湯からでも帰つて来たときみえて、七つ道具を持つて蛇じゃの目の傘めをさしてくる。どうも見おぼえのあるような女だと思つて、すれちがいながら傘のなかを覗いてみると、それがね、親分さん。それ、いつかの潮干しおひの時の女なんですよ」

半七は無言でうなずくと、清次は左右を見かえりながら話しつつづけた。

「こいつ、見逃がしちやあいけねえと思つたから、わっしはそつとその女のあとをつけて

行くと、それから小半町ばかり行つたところに瓦屋がある。そのとなりの生垣いけがきのある家へはいったのを確かに見とどけたから、それとなく近所で訊いてみると、その女はおとわといつて深川辺の旦那を持つているんだそうです。なるほど、庭の手入れなんでもよく行きどいていて、ちよいと小綺麗に暮らしているようでした」

「そうか」と、半七は笑いながら又うなずいた。「それは御苦労、よく働いてくれた。その女は三十ぐらいだと云つたつけな」

「ちよいと見ると、二十七八ぐらいには化かすんだけれど、もう三十か、ひよつとすると一つや二つは面つらを出しているかも知れません。小股こまたの切れあがった、垢ぬけのした女で、生まれは堅気かたぎじゃありませんね」

「判つた。わかつた。路の悪いのによく知らせに来てくれた。いずれお礼をするよ」

清次に別れて、半七は往来に突つ立つて少しかんがえた。清次が乗せた潮干狩の客は、かの怪しい男となにかの關係があるらしい。現にそのひとりの女は颯風の最中に彼と話していたらしいという。かたがたこの潮干狩の一と組を詮索すれば、自然に彼の正体もわかるに相違ない。これは神田川へ行つて千八を詮議するよりも、まず小梅へ出張つてその方をよく突き留めるのが近道らしい。こう思案して、半七はまっすぐに小梅へゆくことにし

た。陰るかと思つた空は又うす明るくなつて、厩橋うまやの渡しを越えるころには濁つた大川の水もひかつて来た。

「傘はお荷物かな」

半七はまた舌打ちをしながら、向う河岸へ渡つてゆくと、その頃の小梅なかの中の郷ごうのあたりは、為ため永なが春しゅん水すいの「梅曆」に描かれた世界と多く変らなかつた。柁木まさきの生垣を取りまわした人家がまばらにつづいて、そこらの田や池では雨をよぶような蛙の音がそうぞうしく聞えた。日和ひより下駄の齒を吸い込まれるような泥ぬ漣かるみを一と足ぬきにたどりながら、半七は清次に教えられた瓦屋のまえまで行きついた。

となりと云つても、そのあいだにかなりの空地あきちがあつて、そこには古い井戸がみえた。井戸のそばには大きい紫陽花あじさいが咲いていた。半七はその井戸をちよつと覗いて、それから生垣越しに隣りをうかがうと、おとわという女の家はさのみ広くもないらしいが、なるほど清次の云つた通り、ここらとしては小綺麗に出来ているらしい造作で、その庭にも紫陽花がしげつていた。

「しようがないねえ。また庭の先へ骨をほうり出して置いて……。お千代や。掃溜はきだめへ持つて行つて捨てて来ておくれよ」



縁先で女の声がきこえたかと思うと、女中らしい若い女が箒と芥取りを持って庭へ出て来て、魚の骨らしいものをかき集めているらしかった。犬か猫が食いちらしたのかと思つたが、半七は別に思いあたることがあるので、ぬき足をして裏口へまわつてゆくと、女中はその骨のようなものを掃溜めへなげ込んで、すぐに台所へはいつた。

半七はそつと掃溜めをのぞいてみると、魚の骨はみな生魚であるらしかった。犬や猫がこんな綺麗な生魚を食つてしまうのは珍らしい。更に注意して窺うと、掃溜めの底にはやはり生魚の骨らしいのが重なつていた。

半七は引つ返して元の井戸ばたへ来ると、瓦屋の女房らしい女が洗濯物をかかえて出て来たので、道を訊くような風をして如才なく話しかけて、となりの家ではどこの魚屋から魚を買つているかということ半七は聞き出した。それは半町ほど離れた魚虎という店で、ちよつとした料理も出来る女房は口軽に話しかけた。

魚虎へ行つて、半七は更にこんなことを聞き出した。おとわの家はお千代という女中と二人暮らしで、深川の木場の番頭を旦那にしているということ、なかなか贅沢に暮らしているらしい。旦那が来た時には、いつでも三種四種の仕出しを取る。そのあいだにも毎日なにかの魚を買うが、三月の末頃からは生魚の買物が多い。別に人もふえた様子はない

が、たしかに買物は多くなつた。犬や猫は一匹も飼っていない。これだけのことが判つて、半七の肚はらのなかには此の事件に対するひと通りの筋道が立つた。

## 四

これだけのことが判つた以上、すぐにおとわを呼び出して吟味してもいいのである。しかし彼女は三十を越して旦那取りでもしているような女であるから、ひと筋縄では素直に口を明かないかも知れない。女の強情な奴は男よりも始末がわるい。半七はたびたびそれに手懲りをしているので、彼女がいかに強情を張ろうとも、抜きさしの出来ないだけの証拠をつかんで置かなければならないと考えながら、魚虎の店を出てまた引返してくると、途中で若い女に逢つた。それはおとわの家の女中で、小風呂敷を持って何か買物にでも出てゆくらしかった。

「お千代さん、お千代さん」

自分の名をよばれて、若い女中は不思議そうに見かえると、半七は近寄つて馴れなれしく声をかけた。

「わたしは魚虎の親類の者で、二、三日前からあそこへ泊まりに来ているんですよ。きのうもお前さんが買物に来たときに、奥の方にいたのを知りませんでしたかえ。そら、お前さんが鮠ほらを一尾、鱧きすを二尾、そうだ鰹いしの小さいのを一尾、取りに来たでしょう。こちらから届けますというのに、いや急ぐからと云ってお前さんがすぐに持って行ったでしょう」

お千代は黙っていた。空はいよいよ明るくなって、裂けかかった雲のあいだから日の光りが強く洩れて来たので、半七は彼女を誘うようにして、路みちばたの大きい榎えのきの下に立った。「ねえ、魚虎の帳面をみると、仕出しが時々にある。それは木場きばの旦那のだろう」

お千代は無言でうなずいた。

「それは判っているが、もうひとりのお客様だ。そのお客は四、五日ぐらい途切れて又来ることがある。きのうは来たんだね」

お千代はやはり黙っていた。

「そうして、日の暮れから出て行って、夜なかに帰って来たかえ。それとも今朝になって帰って来たかえ。なにしろ生魚をむしやむしや食って、その骨を庭のさきなんぞへむやみに捨てられちゃあ困るね」

相手はまだ黙っていたが、一種の不安がさらに恐怖に変わったらしいのは、その顔の色で

すぐ覺さとられた。

「ねえ、まったく困るだろう」と、半七は笑いながら云った。「あんな仙人だか乞食だか山男だか判らねえお客様に舞い込まれちやあ、まったく家の者泣かせよ。あの人はなんだえ。うちの親類かえ」

「知りません」

「名はなんというんだえ」

「知りません」

「時々に来るのかえ、始終来ているのかえ」

「知りません」

「嘘をつけ」と、半七は少しく声を暴あらくしてお千代の腕をつかんだ。「あすこの家に奉公していながら、それを知らねえという理窟があるか。まったく来ねえものなら、初めからそんな人は来ませんとなぜ云わねえ。家の親類かと訊きけば、知らねえという。名はなんというと訊けば、知らねえという。それが確かに来ている証拠だ。さあ、隠さずに云え。おまえはいくつだ」

「十八です」と、お千代は小声で答えた。

「よし、少しおしらべの筋がある。おれと一緒に番屋へ来い」

お千代は真つ蒼になつて泣き出した。

「番屋へ連れて行くのも可哀そうだ。魚虎まで来い」

半七はかれを引つ立てて再び魚虎の店へ引つ返すと、魚屋さかなやの亭主や女房も半七が唯の人でないことを覺さとつたらしく、奥へ案内して丁寧ていねいに茶などを出した。夫婦は泣いているお千代をなだめて、もうこの上はなんでも正直まことに申し上げるのがお前の為であると説得したので、年のわかい彼女はとうとう素直すちに白状した。

去年の冬の夜に、乞食こじきだか仙人せんじんだか山男やまおとこだか判らないような男がおとわをたずねて来た。どこから来たのか、それは知らないとお千代は云つた。なんでもおとわが金をやつているらしかったが、男はそれを受け取らなかつた。おとわは結局かれを物置へ連れ込んで住まわせることにした。男はときどきに抜け出して何処へかゆく。そうして、又ふらりと帰ってくる。不思議なことには、かれは好んで生魚なまこを食う。勿論、普通の煮物や焼物も食うのであるが、そのほかに何か生物を食わせなければ承知しない。かれは生魚を頭からむしゃむしゃ食うのである。かれはふところに匕首しゅぽうを忍ばせていて、生魚を食わせないと直ぐにそれを振り廻すのである。それにはおとわも困っているらしい。お千代も気味を悪がつて、

なんとかして暇を取りたいと思っているが、主人からは余分の心付けをくれて、無理に引き留められるので困っている。どう考えても、あの男は一種の気ちがいに相違ない。しかし主人とどういう関係にあるのか、それはちつとも知らないとお千代は云った。

それにしても、そんな怪しい人間が出這入りするのを、近所で気が付かない筈はないと半七は思った。その詮議に対して、お千代はこう答えた。かれは昼のあいだは物置に寝ていて、日が暮れてから何処へか出てゆく。帰ってくる時も夜である。ここらは人家が少ない上に、大抵の家では宵から戸を閉めてしまうので、今まで誰にも覺さられなかったであろう。現にゆうべも宵からどこへか出て行って、夜の明けないうちに戻って来て、あさ飯には小さいそうだ鰹一尾を食って、その骨を庭さきへ投げ出して置いて、物置へはいつて寝てしまったとのことであった。

半七はすぐにお千代を案内者にして、おとわの家へ踏み込んだが、生魚を食う男のすかたは物置のなかから見いだされなかった。あるじのおとわも見えなかった。箆ひきだし斗ひきだしが取り散らされているのを見ると、かれは目ぼしい品物を持ち出して、どこへか駈かけ落ちをしたらしく思われた。

木場の旦那は今夜来るはずだとお千代が云ったので、半七は幸次郎とほかに二人の子分

をよびあつめて、おとわの空巢あきすに網を張っていると、果たして夕六ツ過ぎに、その旦那という男が三人連れでたずねて来た。

連れの二人はすぐに押えられたが、旦那という四十前後の男はヒ首をぬいて激しく抵抗した。子分ふたりは薄手を負って、あやうく彼を取り逃がそうとしたが、とうとう半七と幸次郎に追いつめられて、泥田のなかで組み伏せられた。

彼等はすべて海賊の一類であつた。

おとわの旦那は喜兵衛というもので、表向きは木場の材木問屋の番頭と称しているが、実は深川の八幡前に巢を組んでいる海賊であつた。ほかに六蔵、重吉、紋次、鉄蔵という同類があつて、うわべは堅気の町人のように見せかけながら、手下の船頭どもを使って品川つくだや佃つくだの沖のかかり船をあらしていた。時には上総房州かすさの沖まで乗り出して、渡海の船を襲うこともあつた。おとわは木更津の茶屋女のあがりで、喜兵衛の商売を知っていないが、其の困い者になつていたのである。

疑問の怪しい男は、外房州の海上から拾いあげて来たのであると喜兵衛は申し立てた。去年の十月、かれらが房州の沖まで稼ぎに出て、相当の仕事をして引き揚げて来る途中、人のようなものが浪をかいて彼等の船を追ってくるのを見た。人か、海驢あしかか、海豚いるかかと、

月の光りで海のうえを透かしてみると、どうもそれは人の形であるらしい。伝え聞く人魚ではあるまいかと、かれらも不思議に思つて船足をゆるめると、怪しい人はやがてこちらの船へ泳ぎついて来た。喜兵衛は度胸を据えて引き上げさせると、かれは潮水に濡れたままで船端ふなばたに坐り込んで、だしぬけに何か食わせると云つた。云うがままに飯をあたえると、かれは平気で幾杯も食つた。物も云えば、飯も食うので、それが普通の人間であることは判つたが、一体かれは何者で、どうして海のなかに浮かんでいたのか、その仔細は判らなかつた。なにを訊きいても、かれの返事は要領を得なかつた。かれは自分を江戸へ連れて行つてくれと云つた。

こんな者を連れて帰つてもしようがないので、喜兵衛は残酷に彼を元の海へ投げ込ませると、かれは再び浮き出して、執念ぶかく船のあとを追つて来た。それが大抵の魚よりも早いので、喜兵衛もなんだか恐ろしくなつて来た。迷信の強い彼等は、この怪しい男をすてて帰つて、それがために何かの禍いをまねくことを恐れたので、再び彼を引き上げさせて、とうとう江戸まで連れて帰ることになつた。

金杉の浜へ着いて、ここで怪しい男と別れようとしたが、男は飽くまで付きまどつて離れないので、喜兵衛らは持て余した。一つ船に乗せて来て、自分たちの秘密を薄々さと覺られ



たらしい虞おそれもあるので、いつそ彼を殺してしまおうかとも思ったが、人の腹の底を見透かしているような彼のするどい眼にじろりと睨きもまれると、胆きもの太い海賊共も思い切つて手をくだすことが出来なかつた。子分のひとり品川に住んでいるので、喜兵衛はひと先ずそこに預けて彼を養わせることにしたが、かれは正しょう覚がく坊ぼうのように大酒を飲んだ。不思議に生魚を好んで食つた。そうしているうちに、どうして探し出したか、深川の喜兵衛の家へもたずねてきた。更に進んで、小梅のおとわの家へもその怪しい姿を見せるようになった。時によると、どうしても帰らないので、おとわはよんどころなく物置のなかに泊めてやることもあつた。かれは品川に泊まつて、今まで小こ半はん年としの月日を送つていたが、それが人の眼に立たなかつたのは、いつでも隅田川から大川へ出て、更に沖へ出て、水のうえを往来していた為であろう。かれは魚とおなじように、どんなに冷たい水でも平気で泳いだ。ただ、水中で鮫さめなどに襲おそわれる危険を防ぐ為だと云つて、常に匕首しゅをふところに忍しのばせていた。

ことしの三月四日、喜兵衛が同類四人とおとわを連れて品川の潮干狩に出てゆくと、かの怪しい男がそこらを徘徊はいかいしているのを見た。悪い奴やつが来ていると思ひながら、わざと素知らぬ顔かほをしていると、午すぎになつて彼は「颯はや風かぜが来る、潮うしほが来る」と叫んであるい

た。そうして、その警告の通りに恐ろしい颯風が吹き出して、潮干狩の人々を騒がしたので、喜兵衛はいよいよ驚かされた。その以来、かれらは仕事に出るたびに、かならずこの怪しい男と一緒に乗せてゆくことにした。彼を乗せてゆくと、いつも案外のいい仕事があるので、かれらの迷信はますます高まった。かれらは彼の名を知らないなので、冗談半分に誰かが云い出したのが通り名になって、かれらの仲間では先生と呼ばれていた。

喜兵衛と同時に召し捕られたのは、重吉と鉄蔵のふたりで、その白状によって他の六蔵と紋次もつづいて縄にかかった。自分の船頭共もみな狩りあげられた。ただ、かの男とおとわのゆくえだけは当分知れなかったが、それから半月ほど経った後、羽田の沖に女の死骸が浮かびあがった。それはかのおとわで、左の乳の下を刃物でえぐられていた。

「大体のお話は先ずこれまでですが、どうです、その変な男の正体は……。お判りになりましたか」と、半七老人は云った。

「わかりませんね」と、わたしは首をかしげた。

「それはね。上総無宿かすさの海坊主万吉という奴でした」

「へえ、その生魚を食う奴が……」

「そうですよ」と、半七老人はほほえんだ。「九十九里ヶ浜の生まれで、子供のときから泳ぎが上手で、二里や三里は苦もなく泳ぐというので、海坊主という<sup>あだな</sup>綽名を取ったくらい  
の奴です。そいつがだんだんに身状みじょうが悪くなつて、二十七八の年にとうとう伊豆の島へ  
送られた。十年ほど島に暮らしていたのですが、もう辛抱が出来なくなつて、島ぬけを  
考えた。といつて、めつたに船があるわけのものではありませんから、泳ぎの出来るのを  
幸いに、いつそ泳いで渡ろうと大胆に工夫くふうして月のない晩に思い切って海へ飛び込んだの  
です。いくら泳ぎが上手だからといつて、一気に江戸や上総房州まで泳ぎ着ける筈はあり  
ませんから、その途中で荷船でも漁船でもなんでも構わない、見あたり次第に飛び込んで、  
食い物をねだつて腹をこしらえて、あるところまで送つて貰つて、そうしてまた海へ飛び  
込んで泳ぐという遣り方をしていたんです。なにしろ変な人間が海のなかから不意に出て  
くるんですから、大抵の者はおどろいてしまつて、まあ、云うなり次第にしてやるという  
わけで、廻り廻つて房州の方へ……。はじめは故郷の上総へ帰る積りだつたそうです」

「おそろしい奴ですね」

「まったく恐ろしい奴ですよ。ところで、房州沖で喜兵衛の船に泳ぎついて、そこで飯を  
食っているうちに不図かんがえ直して、故郷へうかうか帰るのは剣呑けんおんだ。いつそ此の船

へ乗つて江戸へ送つて貰おうと……。それから先は喜兵衛の白状通りですが、こいつがなかなか凶太い奴で、島破りのことなどは勿論云いません。わざと気違いだか何だか得体のわからないような風をして、ずうずうしく江戸まで付いて来たんです。しかも蛇の道は蛇で、この船が唯の船でないことを万吉は早くも睨んだものですから、江戸へ着いてからも離れようとしなない。離れたらすぐに路頭に迷うから、執念ぶかく食いついていての方が得です。こつちにも弱味があるから、どうすることもできない。結局、品川の子分のところへ預けられて、鱈腹飲んで食つて遊んでいる。さすがの海賊もこんな奴に逢つたのが因果です。そのうちにだんだん増長して喜兵衛の家へ押し掛けて行く。おとわの家へも行く。それも飲み倒しだけならいいが、しまいには手籠め同様にしておとわを手に入れてしまったんです。おとわも勿論素直に云うことを肯く筈はありませんが、旦那の喜兵衛も一目置いていような変な奴にみこまれて、怖いのが半分でもあ往生してしまつたんでしょう。しかしそれを喜兵衛に打ち明けるわけにも行かないので、忌々ながら万吉のおもちゃになつていっているうちに、わたくし共がだんだんに手を入れ始めて、女中のお千代が魚虎へ引つ張られて行つたので、おとわもこれはあぶないと感付いたんでしょう。物置にかくしてある万吉をよび出して、早くここを逃げてくれと云うと、万吉はそんならおれと一緒に逃げ

ろと云つて、例のヒ首をふりまわす。もう旦那と相談するひまも無しに、おとわは目ぼしい品物や有り金をかきあつめて、無理無体に万吉に引き摺られて、心にもない道行みちゆきをきめたんです。昼のうちは近所の藪のなかに隠れていて、夜になってから千住の方へまわつて、汐入堤しおいりつづみあたりの堤どての下に穴を掘つて棲んでいましたが、それも人の目に着きそうになつたので、又そこを這い出して今度は神奈川の方へ落ちて行く途中、おとわが隙をみて逃げようとしたのが喧嘩の始まりで、とうとう例のヒ首で命を取られることになつてしまつたんです」

「その万吉はどうしました」と、わたしは又訊きいた。

「神奈川の町で金に困つて、女の着物を売ろうとしたのから足がついて、ここでいよいよ召し捕られることになりましたが、その時には髭などを綺麗に剃つて、あたまは毬栗いがくりにしていたそうです。島破りの上に人殺しをしたんですから、引き廻しの上で獄門になりました。生魚を食うのは、子供のときから浜辺で育つて、それから十年あまりも島に暮らしていた故せいですが、だんだんに詮議してみると、なにも好んで生魚を食うというわけでもない。人を嚇かすためにわざと食つて見せていたらしいんです。それがほんとうでしょう。こう煎じつめてみると別に變つた人間でもないんですが、ただ不思議なのは潮干狩の日に

颶風はやての来るのを前以つて知つていたことです。それは長い間、島に暮らしていて、海や空を毎日ながめていたので、自然に一種の天気予報をおぼえたのだということです。が、それはほんとうか、それとも人騒がせのまぐれあたりか、確かなことは判りません。しかし万吉が牢内できようは雷が鳴ると云つたら、果たしてその日の夕方に大きい雷が鳴つて、十六カ所も落雷したと云つて、明治になるまで牢内の噂に残っていました」

「じゃあ、きのうはその海坊主に天気予報を聞いて行けばよかったですね」と、わたしは云つた。

「まったくですよ。ところが、きのうは生憎あいにくにそんな奴が出て来なかつたので。あははははは」と、老人は又笑つた。

# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（三）」光文社文庫、光文社

1986（昭和61）年5月20日初版1刷発行

1997（平成9）年5月15日11刷発行

※旺文社文庫版を元に入力し、光文社文庫版に合わせて校正した。この過程で確認した、両者の相違を示す。

・時々陸《おか》や船に「#旺文社文庫版「時々陸《おか》や船へ」」

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：網迫

校正：柳沢成雄

2000年9月23日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 半七捕物帳

## 海坊主

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>